
究極生物コタツ

吉川明人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

究極生物コタツ

【Nコード】

N2147V

【作者名】

吉川明人

【あらすじ】

宇宙の光速航行ができるようになってから、地球人はものすごい早さで宇宙に進出した。あたしはおじいちゃんがいてる、惑星SSa-16 (Safety Sighting 観光型 安全レベルA-No.16) の宇宙港に着いて、渋滞に巻き込まれてるおじいちゃん待ってる間に散歩しとったら、迷子になった。そこで自分から『究極生物』やて名乗るネコそっくりの宇宙ネコ？ と会った。

ネコがしゃべるとる!...? (前書き)

これを書いているのは生まれも育ちも関西人です。

ネコがしゃべつとる！…？

ジュニアスクール最後の夏休み、あたし稲里誠恵いなさとまへは1人でおじいちゃんの住んどる惑星SSa-16 (Safety Sights eing 観光型 安全レベルA-No.16) にきた。

人間が太陽系の外の星に暮らすようになってから51年もたったけど、これも光より速う移動する方法を発見したキタノダ博士のおかげや。

博士の娘さんの名前から付けられた『ヒカリちゃん』理論のおかげで、今では恒星間旅行は当たり前になつてゐる。

光より速いの、なんでヒカリちゃんやねん！ ってツツコミはもう使い古されてるねん。

せやけど環境が違ふ別の星に人間が暮らせるよう造り変える方法ができてからは、ものすごい早さでいろんな星に住めるようになったんや。

一時はブームにもなつたくらいで、スターバブルとか呼ばれたんやで。

当時の宇宙港にもものすごい数の人らが詰めかける古い映像は時々映像で流されるけど、ようあんだけ集まつたもんや。

そのおかげで、今のあたしらは地球から月経由して470光年離れた惑星SSa-16に、6時間のフライトで到着できるようになったんや。えらい進歩やで。

SSa-16の宇宙港に着いたけど、おじいちゃんらが迎えにきてるはずなのに、見あたらへん。

ケータイに連絡したら、宇宙港バスが渋滞につかまつてゐるらしい。宇宙にどんどん進出してるのに、地上はどこ行つても渋滞してる。特にこのSSa-16は観光惑星やから時季によつてもものスゴ混む

んや。

せやから少し早よう家出といて言うてたのに。

しゃあないから時間つぶしに歩きながら外眺めてたら、いろんな宇宙船停まってる。

個人用の小型のからジャンボサイズまで、民間の宇宙船会社の船体は表面にコマーシャル流れてるから、えらい派手や。

そんなの1番はじつに、船体ナンバーだけの愛想ないグレーの宇宙船が停まってる。

ああいうのは近づかんほうがええねん。

後ろめたいオッサンらが乗ってるか、秘密のことでもやってるオッサンらが乗ってるんや。大体、はじつこいうところがアヤシいわ。

「ちやうねん。これから流されるコマーシャルデータ読み込んでるだけやっちゅーねん！」

とりあえず自分でツツコンどこ。

せやけどなんも動いてへん、描いてへん宇宙船で、逆に珍しいからケータイで撮ったろ。

みんなー、珍しい宇宙船おるでえ。

画像アップしたら、すぐ『初めて見た！』『なんか変な感じ』『すっげ！』そんなの飛んでるの見てみてー』とか感想返ってくる。

それにしても……ここ、どこやる？

なんや貨物とか荷物ばかりで誰もおらへん。ひよっとして……。

「うわぁ！ あたしまた迷てるやんー！」
アカンねん。

あたしめちやめちや方向音痴やねん。
なんや知らんうちに迷ってしまうんや。
分かってる。分かっててもじつとしてられへんねん。

「おい、おまえ」

うわビックリした！　ってあれ？　誰もおれへん。ひょっとして怪奇現象！？

「なにをキョロキョロしている？　ここだ」

また聞こえるー！

「おい！　足元だ、下を見る」

「へ？」

下見たら、まっ白のネコがおる。

あんたか？

あんたが話しかけたんか？

って、そんなことあら……

「やっと気づいたか」

「うええええ！　なんやあ！　ネコがしゃべっとるー！ー！」

ネコがしゃべっとる!…?

「オレはネコではない!」

「なんなん? なんかのドッキリ? それともロボットなん?」

「ドッキリの意味は分らんが、オレはおまえが考えているものは違う。」

オレはおまえたちが惑星UUe-6447と呼んでいる『フアリアロ』という星から拉致・監禁された」

惑星UUe ……まだぜんぜん環境とか分かってへん6447番目の星言うつこつちゃ。

頭にUU(Unknown Undeveloped 未知・未開発型)が入ってるし、しかも安全度は最悪のレベルE ……このSSa-16とは大違いの、めっちゃめっちゃ危険な星や。

「ほんまにロボットちゃうの?」

「違う。分かりやすく言えば宇宙人だ」

「宇宙人……ネコやん。宇宙ネコ」

あれえ、せやけど確かにネコとはちよつとちがうけど、よう見たらめつちやカワイイやん!

「おまえたちの基準で判断するんじゃない。オレから言わせれば、おまえは巨大なラッサバだぞ」

「ラッサバって、なんなん?」

「フアリアロの熱帯に暮らす体毛がとても派手なサルだ。さらに、オレから見ればおまえが宇宙人だ」

「そうなん? へえー。あたし宇宙人なんや。」

じゃあネコの宇宙人がなんでこんなところにおんの?」

「だからおまえたちの手によって、拉致されてきたと言っただろう」「あたしらの手えで? と言うことなん?」

「ふむ。どうやらおまえたち地球人すべてが理解している問題ではないようだな。」

ではまず話を整理しよう。オレは地球人が地球の知的生命体であるように、フアリアロという星の知的生命体だ。

しかし、おまえたち地球人はオレたちを外見だけで珍しい生き物として、拉致・監禁、早く言えばペットにしようとする。

しかし、オレたちはそんな境遇よりも、生まれた星の環境で自然に暮らすことを望んでいる」

「なんやよう分からへんけど、宇宙に進出してから珍しい生きもんブームが起きてるからなあ。」

あんたもそれで捕まったんか、かわいそうになあ」

「おまえたち地球人は外宇宙に進出したばかりのくせに、次々他の星に暮らす生き物の生存権を奪い、侵略を続けている。」

だから銀河連合へ所属させるには未発達だと多くの星系から反対されている」

「地球人ってまだ未発達なん？　ほんならその銀河連合いうところに入ってる星ってすごいんやろうなあ」

「地球も科学技術的にはクリアしている。しかし、他の星への侵略を続けるような幼稚さでは加入は認められない。」

それぞれの惑星に暮らす生き物がどのような姿に見えても、対等の立場を取り、権利を認められないようでは野蛮な種族と見られても当然だ。

このままでは銀河連合はしかるべき処置を取るだろう」

「しかるべき処置ってなに？」

「地球人が侵略したすべての星から退去させ、地球内だけでとどまるよう連合軍の監視がつけられる。」

もちろん警告はするが、残念だがこの処置を受けるに至った文明は無視することが多く、抵抗するなら攻撃も辞さない。

かつて7種の知的生命体が滅んだ経歴があるが、それも銀河全体の平和のためだ」

「うわあ！ そんな大変やん！」

「まあ、今すぐというわけではないから安心しろ。
だからといって、このままではそうなる。そうならないよう考え
を改めるべきだ」

「そんなん、あたしに言われても……」

「分かっている。注意しているだけだ。」

「いずれ銀河連合の特使が地球人の代表とコンタクトを取るだろう」

「それやったら良かった」

「しかし、おまえ個人にできることはある」

「なんなん？」

「まず、おまえ自身が他の星の生き物を欲しがらないことと、身近
な者が欲しがっている場合いさめることだ」

「いさめる？」

「やめさせることだ。その生き物にとってなにが本当の幸せかを理
解してな」

「せやけど、ものすごく可愛がったはる人もいはるけど」

「それはおまえたちの基準から見た可愛がりかただ。」

「おまえは他の惑星の者から一方的な感覚で可愛がられるなら、家
族や友だちから突然離ればなれにされ、首輪をつけられ自由を奪わ
れてもいいか？」

「それは……イヤやなあ」

「もちろんその状態に満足できる生き物もいるし、そうでなければ
生きられない生き物もいるだろう。」

「しかし、ガマンできないほうが自然だろう？」

「……そうか。そうやんなあ。うん、そんなんあったら、いめさる
ことにするわ」

「いさめるだ！ しかし、おまえは理解が早い。オレが選んだだけ
のことはある」

「選んだ？ あたし？」

「そうだ。おまえに手伝ってもらいたいことがある」

「あたしに？ なにを？」

ネコがしゃべっとる！…？

「今オレは地球人の体の特徴やサイズに合わせて作られた文化にいる。

いくらオレが究極生物とはいえ、初めて見る機械や道具を前にしてスムーズに行動できない。

こういう場合にはその文化を作った生き物に協力を要請するのが最も効率的だ」

「あたしがおると便利ゆうことやな。

せやけど、なんでなん？

あたしまだ子どもやから、そんなに自由に動きまわれへんで。しかも今は迷子の最中なんや」

「そうかも知れん。しかし、おまえはオレを助けてくれた」

「助けた？ なに？ あたし知らんで」

「その装置だ、それでオレが閉じ込められていた宇宙船を照らしてくれただろう」

「あ、ひよつとしたらケータイで写真撮ったのん？ あんたこの宇宙船に乗ってたん？」

さっきの愛想ない宇宙船の画像を見せたらうなずいた。

「そうだ、そこに身動きを封じられ閉じ込められていた。

オレは光が栄養源だ。

そこにおまえが活力をくれる光を浴びせてくれたおかげでやつらの手から逃れられた」

「光って、これのこと？」

写真撮ったら、ものすごい力がみなぎってくるみたい。

「そうだ。その装置からオレに活力を与える光線、高い栄養源となる波長の光が発せられる」

「光が栄養なん？ よう分からへんけどケータイで撮ったら元気に

なる言うわけやな」

「大ざっぱに言えばそうだ。そしてそんな光を与えてくれたおまえだから信用しようと考えた。」

悪いが、今のところほかに信用できると思える地球人がいない」

「そら、さらわれた先の星のもん信用せえ言うてもなあ」

「しかしオレの目に狂いはなかった。」

おまえは短時間で状況を理解し、オレと対等に話している。信用に足る」

「あたしあんまり気にせえへんし、マンガとかでもそういうのあるからなあ。」

ほんで、あたしなに手伝ったらええの？　って、元の星に戻る手伝いしかないわなあ」

「確かにそれもある。しかし、残念だがそれは叶わないだろう。」

フアリアロはオレたちが暮らす以上、地球人にとって今後未知の星のままだ。

現状でフアリアロに向かおうとする宇宙船はないし、今度いつフアリアロに向かうかの情報も入手できない。

それよりも、オレ以外に様々な星から拉致されてきた生き物があの宇宙船に閉じ込められている。彼らをなんとか逃がしてやりたい」

「ほんならそこに捕まってる他の生きもん、檻から逃がしたらええん？」

「そんなことをすると大変なことになる。」

よく考える。それぞれの星から集められた生き物たちは今、暮らしていた環境とまったく違う場所に連れてこられている。

ケージから出せば、環境の違いから最悪の場合、死に至ることもある。

かわいそうだがケージに閉じ込めたまま元の星に戻してやらなくてはならない」

「あ、そうか。せやけどそんなどうやってやんの？」

「あの宇宙船には自動操縦モードがあった。」

過去の航行データを解析し、各ケーヅを拉致された星ごとで解放するプログラムを作り、無人で発進させればいい」

「プログラムなんあたし作れへんで」

「オレの言うとおりに打ち込んでくれればいい。プログラムの作り方は先ほど情報の収集の際、理解している」

「プログラムまで作れるん？ あんたスゴイなあ」

「ただ、オレの手でコンピュータへの打ち込みは困難だ。それを協力してくれ」

「あたしに打ち込み……ええで。」

ところでさつき究極生物ゆたけど、あんたのどこが究極生物なん？」

「生き物として最高に発達しているということだ。」

「これまで我々よりも発達している生き物は発見されていない」

「ほんまに？」

「今おまえとオレは会話をしている。」

「これがどういうことだと思う？」

「なんでって、そら、ネコが話すんはおかしいんやろけど、宇宙人やったら話できてもええやん」

「そうではなく、なぜ拉致されてきたばかりの宇宙人が地球の言葉を話せると思う？」

「ほんまや、なんでやろ？」

「なんやしらんけど、頭抱えとる。」

ネコがしゃべっとる！…？

「ケージ脱出後21分間で地球人が情報を蓄積、交換する方法を探し出し、コンピュータにアクセスして情報を読み取って覚えた。こんなことが地球人には真似できないことも理解している」

「21分で違う星の言葉覚えられるん？ うわ、それはスゴいわ。あたしいまだに火星語ニガテやのに。」

「ゆーか、あたしその間ずっと迷子でさまよってたんやなあ」

「ようやく分かってきたか？ さらにオレたちはどんな環境でも生き延びることができる。ゆえに究極生物と称している」

「せやけど、捕まってもたんやろ？」

「あれには不覚を取った。しかし衛星軌道からの高出力電磁ビームによるピンポイント攻撃の直撃で一時的に動けなくなった。」

その後、絶対零度のケージに捕獲され動きを封じられていたのだ」

「で、電磁ビーム直撃！ アカンアカン、それはアカン。へっ？

絶対零度って、ようそれで生きてたなあ」

「生かさず剥製にでもするつもりだったのだろう。しかしそれでも死ぬことはない。」

だからこそ究極生物だ。実際に何度もおまえたちが……」

「どうかしたん？」

「地球人には固有の名前があるな？ おまえの名はなんだ？」

「あたし？ あたしは誠恵。稲里誠恵や。あんたは？」

「オレたちは自分に名前を付けず他人にも付けない。だから名前がない」

「そんな不便なことないの？」

「フアリアロでは問題ない。しかし地球の文化の中では不便だろう。おまえが付けてくれ」

「あたしが付けてもええん？」

「自分では考えつかない」

「そうやなあ。ほんならなんか考えるわ」

……そやな、ネコやし……ネコには小判やし、ネコはコタツで丸なるし。

「ほんなら、あんたの名前はコバンがコタツや、どっちがええ？」

「コバンかコタツ……コバンとは、はるかな昔に使用されていた通貨で宝の代名詞とも言えるものか。」

そしてコタツとは現在もなお根強い愛用者がいる暖房器具……。

地球人の価値基準に関するものより、温まるコタツのほうがいいだろう。コタツと呼ぶがいい」

「うん。ほんならあんたコタツな」

「名前を尋ねたのは、地球人全体を『おまえたち』と呼んでしまうと、誠恵も含まれるため区別したい。誠恵は誠恵と呼び、おまえたちと言う中に入らない。」

そしてフアリアロにやってくる者たちは密猟者、ハンターと呼ぶのが適切だ。ハンターたちは過去に何度かフアリアロにきてオレたちを捕らえようとしたが、もちろん捕まるものはいない。

逆に逃げられないよう宇宙船を壊される者もいたが、もちろんハンターのように武器を使うことはない。そして、ついにハンターは衛星軌道上からの電磁ビームを発射するなどという卑劣な手段を使った」

「ほんまや、ヒドイことするなあ」

「しかしオレで良かった。他のものが連れて行かれていれば、リーダーとして長老たちに顔向けできない」

「え？ コタツがリーダーやったん？」

「まあな。しかしオレが連れ去られた時点で次のリーダーが決まる。そういう仕組みだ」

「そんなん、捕まえられた上にリーダーまでやめさされるんて、か

「わいそうや」

「同情の必要はない。いなくなったりリーダーとは追放や転落ではない。」

選ばれるものは限られているが、数人による持ち回りであり、場合によっては、気候の変化によって1日に数回交替する場合もある。つまりおかれた状況に最もうまく対応することができるものがないリーダーとなる習性だ。個体自体が強く、種族そのものも柔軟性が高いため、生き残る可能性が高い」

「そんなに強かったら、人間みたいに増え過ぎたりせえへんの？」
「フアリアアの女性は生涯を通じて生める子どもの数が決まっている。」

最多で3人。通常は親と同じ数の2人だ。時に1人の場合もあるが、時に3人の場合もある。それで人口はほぼ一定している」

「うまいことできてるんやな」

「オレたちはそうなる自然環境の中に生かされている。地球人もその自覚を持つべきだな」

「よう分からへんけど、たぶんええこと言うてるんやろうなあ」

「……まあいい。ではさっそくだがオレと一緒にきてくれ」

「行き先分かってんの？」

「この施設内はすべて把握している」

よかった！ ほんならコタツおったら迷わんでええやん。

「つて、コタツ待つて〜！」

「早くこい！」

あたしはあわててコタツのあと追いかけた。

えらいこつちゃ！…？

連れてこられたんは、あの愛想ない宇宙船があつた搭乗口横の小さい部屋やった。

「ここでプログラムを作り、送りこむ」

そんなんいうて、なんも警戒せんと入っていくけど、誰かおらへんの？ 大丈夫なん？

「警戒しているのか？ 大丈夫だ」

「なんで分かんのか？ コタツって心まで読めるん？」

「それだけオドオドしていれば分かる。」

オレの嗅覚と聴覚はおまえたちよりはるかに優れている。誰かいるかは見なくとも分かる」

「そうなんやあ」

「ではプログラムを作る。」

誠恵、オレの言うとおり打ち込んでくれ」

「まかせといて」

コタツの言うとおり、行く星とそこで解放する生きもん閉じ込められた檻の順番プログラムしていく。

コンピュータはジュニアスクールから必須の科目やから、打ち込むだけなんはそんな難しいことやあらへん。

「……次に惑星 P R a b - 2 2 (P l a c e o f R e s i d e n c e 居住型 安全レベル A B - N o . 2 2) のコロニー47へ立ち寄ってくれ」

「コロニーから連れてこられた生きもんもいるん？」

「いや、そこは宇宙動物愛護団体『S A P』が所有するコロニーだ。宇宙船の燃料を補給しなければならない」

「そっか、ずつと飛ぶわけいかへんからなあ。せやけど補給してくれるんやろか？」

「連絡を取って頼んでみるが、これまでの活動から考えて信用できると見ている」

「コタツはなんでも知ってるんやなあ」

「情報収集の際、集中して探しておいた」

「……こうしてプログラムみんな打ち込めた。」

「よし、実行キーだ。それでプログラムが起動する」

「ほんなら実行や！」

ポチッと押したけど……宇宙船飛んで行かへん。

「なんでや？ 間違うたんやろか？」

「オレが横から見ていた。プログラムは間違えていない。

ただ別の場所から発進が止められているようだ」

「ほんならもう、密猟のオッサンとかに見つかってもうたん？」

「いや、基本的なことを見落としていた。管制塔から発進許可が下りなければ動けない」

「あ、そうか！ どうしよう……」

「仕方ない、オレが直接コンピュータとつながり、誤作動させて無理やり発進させる」

「そんなん事故になったら大変や！

アカンアカン！！ アカンでえ」

「事故は起こさない。そしてあの宇宙船の持ち主は責任を追及され、刑事問題にまで発展する可能性がある。」

「うまくいけばハンターの存在が明るみに出て世論に一石を投じることもできる」

「……なんやよう分からへんけど、密猟のオッサンらが困るわけやな。」

「せやけどほんまに事故せえへん？」

「拉致された見知らぬ種族であろうと生命は尊重する。当然だろう。一時的な混乱は起きるだろうが、ことは急を要する」

「直接つながるって、どうすんの？」

「見ている」

コタツはコンピュータの裏に手え突っ込んでなんかやってる。

「……着陸待ちが14機に発進待ちが9機か………よし、発進しろ！」

しばらく待ったコタツが自分で実行キー押したとたん、宇宙船が一気に空に昇っていった………よう分からへんけど、成功やな。

せやけどえらい数のサイレンの音聞こえてきた。えらい騒ぎになってもたみたいや。

「そこにいるのは誰だ！ なにをした！！」

ドア開いて顔だしたのは人相の悪いオッサンやった。

えらいこつちゃ！…？

これは絶対悪モンやな。

「逃げるぞ！」

オッサンの顔めがけてコタツが飛びついたら、あわててもがいとる。

ホンマにマンガみたいやって、ゆうてられへん。はよ逃げよ。

もがいとるオッサンの横すり抜けて、通路に飛び出したけど……あれ？ どっちに行ったらええんやろ。

「ともかく逃げる！ あとからオレが探す」

ほんなら安心や！ とにかく走ったらええねん。こついうので捕まったら大変なんや。

……って言うとなら迷てしもた。

せやけど今回は安心や。コタツが見つけてくれるはずや。

こつちから探したらええんやろか？

それともヘタに動かんと、どっかに隠れとったほうがええんやろか？

あ、なんやちようどええとこに隠れられそうな隙間あるやん。あそこにしよ。

コタツ、早よきてや〜。

個別管制室に2人の男がいた。

1人は先ほどの男で、もう1人は銀髪の男。

「もう一度確認したい。お前を襲った白い動物以外に1人いたのだ

な？」

「え、ええ。早く逃げると……その、動物が」

「人間の言葉を話したと？ 気は確かなのかね？」

あきれながらも銀髪の男は部屋の隅に子ども用のカバンを見つけた。

「ここへ子どもを入れたことは？」

「子どもどころか、ここは一般人も入室禁止です」

「分かっている。調べろ」

カバンから中身が乱暴に引きずり出されると、名前の書かれた子どもの品が出てくる。

「稲里誠恵か……今日の乗客名簿を調べろ。すぐに連絡先が分かる」指示された男はあたふたと駆け出していく。

残った銀髪の男は、いまいましげに口をゆがめる。

「……どういふつもりか知らんが、ガキのイタズラにしては、やりすぎだな」

……ホンマにコタツあたし見つけてくれるんやろか。もう1時間以上たってるやん。

はあゝおなか空いたな……カバンあったらお菓子入ってたのに、さっきの部屋に忘れてきたからなんもあらへんし。

「遅れてすまない」

「うわ！ びつくりした。いきなりやな。」

足音くらいたててえな」

「オレはたてないのが普通だ。それより宇宙船は順調に航路に乗った。」

SAPも全面的に協力を約束してくれて、各惑星にちゃんと戻れるかどうか監視船も出してくれるそうだ。

安心していい。次はオレたちの問題を解決しなければならぬ」「問題って？」

「宇宙船を出発させるまでは、発進後速やかに宇宙港を逃げ出せば問題なかった。

しかしあの管制室で誠恵のカバンが見つかり身元がばれた。今やつらは誠恵を捜しまわっている。

やつらが責任を逃れるには、この騒ぎの張本人を誠恵に押し付けて犯人にするのが望ましい。このままではマズイ」

「なんやてえ〜！ そんなんアカンやん！！」

えらいこつちゃ！

「だから逆に相手をつままえればいい。考えてみる、宇宙港には必ず検疫がある。

密輸入されるにはそこをすり抜けなければならない。

あの宇宙船に捕えられていた生き物は34種77体以上にもおよんでいた。

それほどの数をす通りさせるには内通者がいるに違いない。

証拠を押さえて警察に突き出せば誠恵は犯人ではなくなる」

「そんなん、どうやったらええの？」

「幸いやつらはまだ相手を子ども1人と動物1匹と考えている。

オレはすでにあやしい相手のいる場所は目星を付けてある。

やつらが誠恵をつまえる前に、こちらから先に討って出る」

「アカン、そんなんムリやわ」

子どものあたしになにができるゆうねん。

ムリムリ、絶対ムリやわ。

うちとかにも連絡いつてえらいことなるんやろな。

もうガツコも行けへんようになるかもしれへん……。

「……ほら、誠恵」

「なに？ あ……」

どっから持ってきてくれたんか、梅干しのおにぎり差し出してくれた。

「誠恵の出身地ニホンでは、いざという時にこれが一番力が湧くとあつた」

梅干しはちょっと苦手やったけど、おなか空いてるし、せつかく持つてきてくれたんや。

「あ……おいしいわ。梅干しのおにぎりって、こんなおいしかったんや」

「安心しろ誠恵。誠恵にはオレがついている。ファリアアの究極生物コタツがな」

「そやな。そや、コタツも」

ケータイで撮ったら、もっとたくまになる。

おにぎりとコタツの笑顔（？）でなんとなく、なんとかかなりそうな気になってきた。

黒幕が出てきよった！！…？

コタツといっしょに来たんは、宇宙港の中でも立ち入り禁止中の立ち入り禁止の場所……ブロック5に区分けされてるところや。

もちろん監視カメラあるし、警備員いてるし、身分カードとか暗証番号必要なことかあった。

しかもあたしは密猟のオッサンから追っかけられてるんやけど、来れたんは、倉庫出発する時、コタツがおもいことしたからや……。

「このままで行けば、どんなに隠れようと監視カメラですぐに見つかり捕まるだろう」

「どないしたらええの？」

「オレが誠恵の姿を見えなくする」

「そんなんできるん？ スゴいなあ」

「しばらくのあいだは毛布にくるまれていると考え、体の力を抜き楽にしておいてくれ」

言いながら背中向けたコタツの体がブワッ！ て広がって、あたしの体包んだ。

一瞬まっ暗になったけど、ちょっとして目のところだけ外の様子見えるようになった。

首動かして足元見ても……なんもあらへん。せやけど、ほんまフワフワのんに包まれてる感じや。

「どないなってるのこれ？」

「オレの体を薄く伸ばし、外側を光らせている」

「光らせてる？」

「人間の目に見えない範囲の光で一時的な目くらましをしていると考えてくれ。」

赤外線探知機のこと考えれば紫外線で光りたいところだが、誠恵に有害なため赤外線で光っている。

いざという時はできるだけ影響のないように紫外線に切り替える」「ゆうことは、コタツがほんもののコタツになってスゴイ温うなっていることやねんな」

「そうかもしれないが、潜入する少しあいだ、体の力を抜いてリラックスしておいてくれ。不自然な動きは発見されやすい」

「あ、そうなんやゴメン」

「行くぞ」

自分で動かしてへんのに手足が動く変な感じや。

せやけど、ほんまに見えてへんねんな……誰とすれ違っても見られへん。

堂々と警備員の前通つても平気や。

身分カード必要やつたり暗証番号必要なんは、なんでか分からへんけどドア開くし、番号合う。

「究極生物ってなんでもアリやな」

「目星を付けた段階で目的地のルート上にあるドアの身分カードを偽造し、暗証番号を引き出した。他のルートではこうはいかない」

「アヤシイ場所ってどこなん？」

「施設内で最も厳重に警戒されているブロック5と呼ばれる区画。政府関係、特に軍関係の資材を保管してある場所だ。」

ここへの搬入搬出は他とは完全に切り離してある。ただし、検疫港もすぐ隣にある」

「むっちゃアヤシイやん」

「外宇宙からの未知のウイルスの検出など、検疫の結果によっては軍を動かさなければならぬ事態もある。宇宙時代には検疫港・軍関係・緊急医療設備は協力態勢をとるのが普通だ。」

ただし、今回のような悪影響が出る場合もある。

オレはこの態勢をあやしいとにらんだのではなく、それぞれのト

ツプの経歴を確認し、1つにしばらく荷物の流れを調べた。確信はある」

「そんなん出発する前に教えてくれたらよかったのに。なんかもう安心してきたわ」

「だから話さなかった。事態が切迫していることに変りはない。

わずかな油断が根底を揺るがすことがある。実際に相手と会ったものの違っていた場合、こちらの手の内を知られた上で最初からやりなおしとなる」

「脅かさんといてえな」

「脅しではなく事実だ」

「そやからコワイこと言うんやめて〜〜」

……そんなん言いながら、結局誰にも見つからんと密猟のオッサンのいるとこに着いた。

黒幕が出てきよった！！…？

かかっつたドアのカギは、コタツがあっさり開けた。中には髪の毛まっ白のオッサンがおつて、ドア開いたんびつくりしとる。

「誠恵、降ろすので足元に気をつける」

あたしくるんでるコタツが元どおりの姿に戻ったら、オッサン余計にびつくりしとる。

「な、いったいどうやってここへ来たのだ」

「えーっと、なんやっただけ？ 光で見えんようにとかやっただけ」

「答える必要はない。しかし、その反応から確信した。

お前が検疫を素通りさせている張本人であり、誠恵を落とし入れようとしている黒幕だな？」

「なんのことか分からんな。私はケダモノと会話するつもりはないぞ」

「コタツはケダモノやないで！ ファリアアの究極生物なんや」

「そのケダモノで大金を得ているおまえは、ケダモノ以下というわけだ」

「ケダモノが人間に意見するな。地球人こそ宇宙で最高の生物なのだ。」

その我々が未開の惑星に棲む珍しい生物をどうしようと勝手だ。

むしろ我々の手で保護してやらなければならぬのだ。

そして中には珍奇な生物を欲しがる富裕層がいる。その者たちに変わって生物を手に入れてやっているのだ。多少高い値を付けるのが当然だ」

「オッサンなに勝手なことやってんねん。

オッサンがどっかの星の生きもんにさらわれて飼われてもええんか？」

「ふん、あり得ん。あり得ないだろう。地球人はこれから銀河系を、

宇宙を支配していくのだからな」

「なに言つてんねん。コタツ言うつたで、地球なん、まだ未開の星やから銀河連合いうとこに入いらしてもらわれへんねんで」

「なにを言い出すかと思えば、ガキのたわごとか。銀河連合？

今どきそんなバカげた話を信じるやつがいるか。

おっと、お前がそうか。バカなガキめ！」

「なんやてえ！」

「待て、気にするな誠恵。

このタイプは分かりやすい。多くの未開の星で見られるエイボン又的な性格のものだ」

「へ？ エイボン又？」

「適切な言葉が見つからない。表向きには良識があるように見せ、裏ではこのような行動が平気でできるものを意味する」

「ギゼンシヤて言うんちゃうん？」

「偽善者なら表向きに良いことをする。

しかしこのタイプは特になにもしない。ただ良識があるように見せるだけだ」

「ようは悪モンいうことや」

「ふん……ともかくお前が稲里誠恵ということだな。わざわざ自分からここへ来るとは、探す手間が省けた。部下どもにはすぐ戻ってくるよう命令しよう」

「残念だがそれはできない。たつた今、このブロックはオレが封鎖した」

「なんだと」

「この部屋に到着したと同時にすべてのドアの暗証番号が変わるように細工しておいた。

初めから解読したとしてもかなりの時間がかかる。おまえを警察に突き出すには充分な時間だ。ただその前に確認しておきたい。

おまえはなぜ自然界の法則に逆らってまで自分たちの内でしか通用しない金という価値観に捕らわれる？

大局を見すえればそれがいかに無意味なことか理解できるはずだ」
「我々の内であつてもそれが通用するのなら問題ない。この世はどれだけ金を待つてゐるかで社会的地位が決まるのだ。

例えどれほどのクズであつても、金さえ持つていれば尊敬される」
「それやつたらお金持つてへんもんは、あかんみたいやん。あたしのおじいちゃんいつもお金より心が大切や言うてるで」

「金を持つていないやつに限つてそんなことを言うんだ。自分が持たない負け惜しみでな」

「おじいちゃん負け惜しみやないで。そら、大金持ちやないけど広いうちすんでるし」

「中途半端なやつが一番たちが悪いんだ」

「止めておけ誠恵。このタイプになにを言つてもムダだ。自己防衛の理屈を並べることにかけて才能を持つてゐることが多い」

「言い訳だけは上手い言うこつちやな。あたし言い訳した時、おじいちゃん言うてたわ。」

「そんなん言うてたらろくな大人ならへんって。ほんま、言うてたとおりやな」

「やかましい！」

黒幕が出てきよった！！…？

「それよりも、それほど自分の価値観に大見栄を切れるのであれば、決して自分が正しいことをしていると考えているわけではないようだな」

「もちろん正しいことをしているとは思っていないが、間違っているとは思っていないぞ」

「言ってる意味分からへんわ。正しないんやったら間違ってるんやん」

「子どもには理解できないだろう。需要があれば必ず供給が成り立つのだ。」

そしてそれを完全に止めさせようとすればするほどますます需要の熱が高くなる。ましてや自分以外の者が誰も持っていない稀少動物ともなれば、価格は天井知らずだ。

それは人類の欲求、夢を満たしてやっていることと同じ。

こうやって私のように検疫の目をかいくぐらせる者がいるからこそ、それが可能となる。いわば私は夢を売っているのだよ」

「だからおまえたちは幼稚だ。自分たちのためだけの、目先の利益に目が奪われやっていいことと悪いことの判断ができない。」

オレに言わせれば誠惠のほうがよほど大人だ。姿勢がどうあろうとも、オレに対してちゃんと礼儀をもって接したぞ」

「ふん、たかがUIeで捕えられたネコモドキが偉そうなことを言うな。さっさと檻に戻るがいい」

そんなこと言いながら、オッサンが机にあるスイッチ押したら天井から可動式のアームが伸びてくる。

「うわあ！ お約束のやつちゃん。そんなネタ使い古されとるで」

「ネ、ネタではない！」

「安心しろ。こんなものでは捕まらない」

近づいてきたアームをコタツが軽う爪で引つかいたら簡単に折れて壊れた。

「バ、バ力な……大気圏往復用の宇宙船の船体に使われるK P 3合金だぞ」

「ホラ、なんやよう分からへん硬そうな金属が折られること自体お約束なんや。そんなんあたしら二シ二ホンのもんにはウケへんで」

「やかましい！ ウケ狙いじゃない！ こうなったら……」

「なんや、秘密にしとった強力なロボットでも出てくるんか？」

「ど、どうしてそのことを」

「オッサンひねりないなあ」

「誠恵はあいつの行動が読めるのか？」

「ちやうねん、ちやうねん。地球のベタなネタや。お約束言つて展開が決まってんねん」

「文化のひとつというわけか」

「さあ？ 文化ていうか……」

「そこ、無視するな！ さあ出動せよ！ 究極の無敵ロボット。アラキデ6号！」

「誠恵、気をつける。かなりの量のエネルギーが一点に集中している。それなりの破壊力を持つているだろう」

「そうなん？ あのオッサンから考えられへんけど」

「……いやしかし、このエネルギー処理パターンは覚えがある。衛星軌道からオレを撃った電磁ビームと同じものようだ。

おい、おまえはU U e - 6 4 4 7 に向かう宇宙船に電磁ビームを装備したことはないか？」

「んん？ U U e - 6 4 4 7 かどうかは知らないが、ハンターの注文で横流ししたことはあるぞ。

ふふん、ということは君がその獲物かね。これから現れるロボットは電磁ビームごときで捕まるようなマヌケには到底たちうちできないぞ」

「コタツがマヌケやて?!」

「いいから下がっている誠恵」

コタツが言うたとたん左の壁が上がって、中からさや付きピーナツ立てたようなんが出てきた。

せやけど……放射状についてる8本足が気持ちわるう。

黒幕が出てきよった!!!？

「なんか見た目マヌケやな。究極言っんやつたらコタツみたいに可愛いかつたりカッコよかつたりせんとかかんわ」

「アツツパツタ型だな」

「あれってアツツパツタ型って言うん？」

「いや、地球で例えるならバクテリアオファージに近い。

ロボットではなく細菌に感染して増殖するウイルスだが」

「なんや分からへんけど、気持ちわるいもんやな？」

「形状から見て全方位へのレーザー発射が可能な移動砲撃ロボットだろう。オレから見れば旧ロボット開発時代の遺物だ」

「うるさい！ ええい、アラキデ6号。侵入者を捕らえる。殺してもかまわん！」

オッサンに言われたとたん、ピーナツはこっちにシャカシャカ近づいてくる。

イヤやあ、意外に早い。

「机の下にでも隠れている！」

言われたとおり机の下にもぐり込んだけど、コタツ心配や……コタツも吼えとるし、ものすごい音してて、こわあて出られへん。

……せやけどちょっとだけ。

そうつと顔出したとたん、上からピーナツがガッシャンって降ってきて、あたしとまともに顔(?)が合うた。

「誠惠!!!!」

上から降ってきたコタツの爪が、ピーナツの頭切り裂いたと同時に、ピーナツのレーザーがあたしのほっぺたかすめた。

髪の毛ちょっと切れたけど、コタツが角度変えてくれへんかったら……顔面直撃しとったところや。

「……あ、熱つつう。アカン、今のでメガネどっかいつてもうた」
「これか？」

コタツがどっかから、くわえて持ってきてくれたんは……。

「あつ、それや。ありがとう！ あ、あうう」

せっかく探してきてくれたメガネは、片方のつるが切れて、レンズも割れてた。

使えへんことないけどあんまり使いもんにならへん。

「どうしよう。いつもやったら予備持つてるんやけどカバンどっか
いってしもたからあらへん。」

メガネ無いとあたし、20センチ先もハッキリ見えへんねん」

「ちよつと貸してみる」

コタツにメガネ渡したら、なんやジーツと見てフイツとあたし見る。

「近いものは作れる」

「へ？ どうやって？」

「見ていろ、と言っても見えんか」

ハッキリ見えへんけど、コタツの爪がニユーツと伸びてメガネの形になつていく。

「かけてみる」

「うわ！ ハッキリ見えるわ。これまでのんより見えるくらいや！」

「材質と形状を調べ、オレの爪の角質層を利用した。ちよつとやさ
つとで壊れる心配はない」

「うん。ありがとう！ せやけど……」

血いは出てへんけど、ほつぺた焼けるみたいに痛い……って、焼
けたんやって。

こんな時でも自分でツツんでるのイヤや思てたら、コタツがひざ
に乗ってキズなめてくれる……。

「安心しろ誠恵。オレたちのだ液には強い殺菌効果と治癒効果が認
められている。」

この程度のキズなら跡も残らず消える」

感動的やったんが一気に覚めてもうたわ……せやけど、痛みなくなつた。

あれ？　そう言えばピーナツは……いつの間にかグシャグシャに潰れとつた。

「うわ！　コタツ、その目なに？」

ずっとまん丸うて可愛らしかった黒目が、ネコと違ってななめヨコに怒つたみたいに吊り上がって細うなつてて、コ、コワイ。

「……作つたばかりだが、少しのあいだ、すまない」

目のことはなんも言わんと、スゴう静かに言いながら、コタツはあたしのメガネ外した……あ、もうなんも見えへん。

見えへんけど……たつた今、コタツがおつたところから『ナニカ』が、ものスゴい吼えながら飛んでいった。

……体中からなんやいっぱいへんなもん出てて、体も何倍も大きい……そやから、アレはコタツやないねん。

「うあ！　ぎひやああああえああお！！！」

コワイとかくらいやったら絶対出せへん絶望的なオッサンの悲鳴と、機械の壊れる音……あたしも頭抱えて床に伏せるしかあらへんからなにが起こつてんのかさっぱり分からへん。

……て、急に静かになつた。

……終わつたんかな？

黒幕が出てきよった！！…？

「誠恵、メガネを返す」

左からコタツの声が聞こえて、そおつと見たら、ボーッとさつきと変わらへんサイズのコタツと、たぶん、差し出してくれてるんはメガネ。

「うわ！ うわあ！！ なんやコレ」

部屋の中メチャクチャで、壁ごと剥がれ落ちてる。

オッサンは部屋のまん中で大の字になって失神しとる。

「なにやったん？」

「さあ。これまでの自分の行いを思い出ただけだろう」

「なんや、そらしゃあないなあ」

もうコタツの黒目はまん丸に戻った。

密猟と検疫と武器横流ししてた証拠コタツがかき集めて宇宙港の交番に連れて行ったら、警察の人らと軍の人らでちよつとした騒ぎになった。

ドラマとかで利益をむさぼつた悪役がやつつけられた時に、もつと偉いさんに全部ばれて地位失うってのん、ほんまに見られるとは思わへんかったわ。

最後までお約束守ってくれるオッサンや。

カバンも無事に返ってきて、あたしとコタツがホッとして出ようとした時……施設全体がズシン！ って揺れた。

「なんや今の？」

「爆発音だ。位置は宇宙港の地下だな」

「爆発？ 事故でも起きたんやるか？」

「最悪の考えだが、オレがああの部屋を破壊したことが原因かも知れ

ない。なんらかの証拠隠滅のためにな。もしそうだった場合、破壊はこの施設全体に及ぶはずだ」

コタツがそう言うてる間に、もう1回ズシン！ てきた。

「間違いないようだ」

「そんな冷静に言わんというて。せやけど今宇宙港にどんだけ人おるんやろ。あたし降りてきた時もけっこうおったで」

「放送室へ向かおう。パニックになっても構わない、全員を避難させる」

「そんなん、あたし放送室がどこにあるかなんて知らんで」

「港内はオレがすべて把握している。ついてこい誠恵！」

「あ！ 待つて待つて！」

放送室つて書いてあるドア飛び込んだコタツに、中にいた人ら「あれ？」つて顔で見た。

「責任者は誰だ！」

コタツが立ち上がって叫んだとたん、みんなポカンとして顔見合わせる。

そらそうやろ。

「ここのいちばん偉い人だれやあ！」

あたしが叫んだら、いちばん奥でポカンととったおっちゃんがこっちに顔向けたとたん、ポーンとコタツがそのおっちゃんの机の上に飛び乗る。

「今の震動は感じたな！？」

「……え？」

「震動を感じたかと聞いている！」

「……あ、ああ」

「地下で爆発が起きた。そこは宇宙船の燃料庫に近く、誘爆すればこの施設全体が崩壊しかねない危険性がある。今すぐ全館内に退避放送を流してくれ」

「いや、あの……状況が、理解……できないのだが」

「オレは宇宙港の、人間の入り込むことのできない個所の検査・点検・警戒を目的として造られたネコ型のロボットだ！

そのためこうして人間の言葉を話し、2本足で立って歩ける！！それ以外考えられないだろう？

そのオレが地下の爆発を緊急事態と判断して、この施設にいる者たちを即刻退避させようとしているんだ！

オレは今、危険度を示す最高レベルEで動いている。早く全館内に呼びかけるんだ！」

「そ、そう言われても、そこまでの判断を私だけでは……」

「誠恵！ お前の身分カードを渡してくれ！」

あたしの身分カードってなんやあ……？

「左のポケットに入っている！」

左のポケット？ なんや、なんか入っとる……あ！ そうか、コ

タツの作った偽造身分カードだな。

そういうノリか！

「これや！ 読み取って確認してみい」

「こ、子どもが？」

「子どもやいうて、なめとったらアカンで。普段は人前には出えへんけどブロック5まで入れる資格持つてんねんで。ホラ」

読み取られたカードには、微妙にあたしに似てる写真と違う名前が出てるけど、そのほうがええねん。

「うわ！ 本物だ！！ 失礼しました！！！」

「あたしが全責任取つたる、全館放送流しい！ 今すぐにや！」
「す、すぐに流します！」

早速おっちゃんと、部屋におつたみんなで流し始めてくれた。

管制塔の人らはギリギリまで逃げんと着陸しよとしてる宇宙船も全部他の宇宙港へ誘導して、宇宙船にもトラブルなくて、宇宙港近くにおつた宇宙船もあわてて離れた場所に移動して事なきを得た。

一時はパニック起きて、ケガ人も何人か出てしもたけど、放送のおかげでみんな逃げられて、宇宙港全体の爆発やったのに、死んだ人は1人もおらへんかった。

……せやけど……せやけど、コタツが。

……死んでしもた。

死なへん言つたやん!!…?

「あたしらも逃げな!」

放送室から出てコタツに言つたけど、コタツは動かへん。

「どないしたん? 早よ逃げな」

「オレはまだ行けない。誠恵は先に逃げろ」

「なんでなん? 一緒に逃げよ」

「人間は逃げだせる。しかし、乗客の手荷物として運び込まれてい
る生き物たちは逃げられない。オレは彼らを開放してくる」

「そうなん? それやったらあたしも行く」

「ダメだ! オレはこの建物全体が崩壊しようとも生き残れるが、
誠恵は生きられない。根本的な丈夫さが違う」

「せやけど、コタツ置いて逃げられへん!」

「……しょうがない。地球人は言い出したら聞かないことは承知し
ている。ここで時間をムダにしたくない。

しかしこれだけは約束しろ。オレが限界だと判断し、もう逃げろ
と言つた時には逃げてくれ。反対にオレは必ず生き延びると約束し
よう」

「ホンマに? 絶対に生き延びてくれる?」

「絶対だ。オレはなにがあつても死なない」

「分かつた。そんな時きたら合図して」

「もちろんだ」

コタツのあとについて手荷物置き場に着いたら、ようけえ生きもん
いてる。

危険なん分かつてるんやろう、みんなものスゴイ吠えたり暴れた
りしてる。

こんなんで逃がしたら危ないんちゃうの?

「

!

「Z！」

うわ、ビックリした！

コタツなに叫んでんの？

せやけど、そのとたん吠えたり暴れたりしとった生きもんピタツと静かになった。

「すべての生き物の共通語でこれから助けることを教えた。カギさえ開けてやれば自ら避難する。誠恵、誘導してやってくれ」

言いながらコタツは次々カギ壊していく。ドア開いたらどんどん逃げ出して……わあ！ こっち、こっちくる！

「あっちゃ！ 出口はあっちゃ！」

あわてて言うたら分かったみたいで、みんなあたしの言う出口のほうに走っていく。

あとから出られた子らもそのあとについて逃げてくれる。

せやけどスゴいなあ、すべての生きもんにも共通の言葉なんあるんや……あたしぜんぜん分からへんかった。

「あれ？ ほんならあたし生きもんちゃうん？」

「悩むな誠恵。お前たちは特化した言語を持っているため理解できなくなっている」

「そうなん？ 勉強したら分かるようになるかなあ……アカン、あたしコトバ苦手やったんや」

最後の1匹が逃げて、残るはあたしとコタツだけや。

「よし！ 行くぞ誠恵」

「うん！」

あたしにも逃げよとした時、ゴンツ！ ってさっきのズンとぜんぜん違う衝撃が足下に来た。

「しまった！ 誠恵！！」

コタツが飛びついてきた時、足もと光った。

アカン！ 真下からの爆発や！
なんも見えへん！

……コタツ、大丈夫やろか……。

死なへん言つたやん!!…?

目え覚めたらまっ暗なとこに倒れとつた。

死んでもたら、こんななんもあらへんとくるんやなあ……手で
手え触つてもちゃんと感じるし、顔触つても顔の感触するけど…
…やっぱ死んでもたんやろなあ……。

あのあとどうなったんやろ?

おじいちゃん迎えに来てくれてたのに。

地球におるお父さんとお母さん悲しむやるなあ……親友のりつち
やんとか順ちゃんにも、もう会えへんねんやるなあ。

死んでもたのに、泣けるんやなあ。

「泣くな誠恵。誠恵は死んでいない」

まっ暗な中からコタツの声した。

「コタツ? どこなん? コタツ無事やったんか?」

「……無事だ。しかし、もう少し待て。今はおとなしく……して、
おいてくれ」

「うん、分かった」

コタツの言葉で安心して、なんや氣い抜けてもつた。コタツ無事
やったんや、ほんであたしも大丈夫やったんや……。

「この辺りまでくれば……大丈夫だろう」

まっ暗な中にコタツの声したとたん、バカッと周りの壁が開いた。
うわ、まぶし! 目えくらむ。

「ここどこやあ？」

「あ！」

壁やない！ コタツの体が伸びてあたし守ってくれとったんや！

「コ、コタツ！ ああ！！ なんやあんたそのケガは！！！」

宇宙港から離れたところにある芝生の空き地で、あたし出してくれたとたん倒れたコタツは、白かった毛皮あちこち焼け焦げて黒うなってるし、全身キズだらけ……。

体ボロボロなのに、こんなとこまで連れてきてくれたんか。

倒れたコタツから血が広がって……宇宙港のほう見たら、完全に壊れてて黒煙上がってるところからずうっと血の跡続いてるやん！！

「あんたそのケガであたしここまで運んできたんか？ そんなんムチャヤ」

抱き上げたかったけど、このケガや。へたに動かしたらあかん。

「……これでも、最低限の……距離だ。二次爆発の、危険も……あった」

息絶え絶えに苦しそうなのに、あたしなんにもでけへん……。

「そんなん……そうや！ お医者さんに見せな！」

「……ム、ムリだ。地球の生き物とは体の、構造が違う。」

それに……そんなことをすれば、オレは解剖され、標本として、さらされる……それは望まない」

「せやけど……せやけど……そや！ ケータイで撮ったら元気なるんやったな！」

あわててケータイで撮ると、ピクツと動いてくれた。

「……楽になる。しかし、この体は……もうダメだ」

「そんなんイヤヤ！」

「大丈夫だ、安心しろ。究極生物であるオレは……死なない」

ケータイ撮り続けても、コタツの言葉がだんだん弱あなっていく。

「……コタツ、こうしたら元気になる言つてたやん！ 死なへん言うたやん！」

「……悪、かったな……いろいろと、巻き込んで……」
少しだけ顔上げて、あたし見ながら言つた。

「そんなにかまへ……！」

コタツの頭がガクツと落ちて、全身から力が抜けていく……。

「コタツ死なんというて！ 死んだらイヤや！ お願いやから死なんというて！ コタツ！」

コタツ抱き上げて、鼻先に頬を近づけても……もう息してへん。

「なんでやねん、いきなり来て、いきなり死ぬんか！」

そんなん勝手や……コタツ……！」

あたしの腕の中の、コタツが……だんだん冷とうなっていくん、冷とうなつて欲しないから抱きしめて、体さすつても全然温うならへん。

さっきまでサラサラフワフワしotta毛皮もボロボロのナイロンみたいな手触りになつてゐる。

「コタツ……コタツ……コタツううう……」

涙がコタツの顔に落ちて、まるでコタツも泣いてゐるみたいや。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2147v/>

究極生物コタツ

2012年1月10日23時47分発行